

令和7年岩手県モデル事業所伴走支援

施設概要 介護老人保健施設ハートフルもりおか

施種種別	介護老人保健施設 短期入所療養介護 通所リハビリテーション 居宅介護支援事業所
定員	100名
開設日	2005年5月9日
所在地	岩手県盛岡市

手順01 改善活動の準備をしよう

- ・改善活動のプロジェクトチームの立ち上げ
- ・プロジェクトチーム内でのプロジェクトの目的・メンバー・取り組み期間等の周知
- ・プロジェクトチーム外の職員へ向けた、活動の周知

手順02 現場の課題を見える化しよう

- ・全職員に「課題気づきシート」への記入を依頼し課題を収集。総課題件数305件。
- ・集まった課題の因果関係図や、「課題分析シート」を用いた原因や悪影響の深堀を実施。
- ・全体の約半数（45.9%）が、「8. 間接業務の非効率、逼迫」と「5. 情報の非効率さ」の2項目に偏り。

- ①バイタル測定の改善と業務動線の最適化
- ②情報共有の仕組みを構築、PCへの一本化推進

手順03 実行計画を立てよう

導入したテクノロジー

非接触型体温計

活用したテクノロジー

ワイズマン

①バイタル測定の改善と業務動線の最適化

②情報共有の仕組みを構築、PCへの一本化推進

取組む課題

1

朝人員が少ない中、利用者全員のバイタル測定を行うことに職員が負担を感じている。

課題の原因

- 夜勤明けと早番の業務集中による職員負担増と事故の危険性。
- 早朝実施による利用者の睡眠妨害。
- 個別ケアによる夜勤職員間の業務差。

改善活動の方針

- バイタル測定の実施意義を職員間で共有する。
- 負担の少ない測定時間を検討・試行する。
- 業務動線の共有と非接触型体温計の導入。

関与する指標

- 意義・必要性の理解促進。
- 夜勤明けの測定人数を削減（25人→10人）。
- 職員の満足度向上。

2

申し送り（情報共有）プロセスが非効率である。

- 申し送りツール（ノート、PC、口頭）が複数存在し非効率。
- 共有方法の多様化により、重要な情報が絞れていない。
- 情報の伝達漏れが発生している。

- 情報共有の仕組みを構築する。
- 使用ツールをPCに一本化し、活用を推進する。

- 申し送り・手書き業務日誌にかかる時間を短縮し、他業務へ転換。
- 情報伝達漏れをゼロにする。

手順04

改善活動に取り組もう

導入したテクノロジー

非接触型体温計

①バイタル測定の改善と業務動線の最適化

1

実施意義の共有と
周知を徹底

- ・リーダー会議での伝達や文書配布を通じ、朝食前のバイタル測定の意義と必要性を全職員に明確に伝達した。

2

新測定手順の設定
と体温計の導入

- ・「安静時」測定のタイミングを明確化し、測定時間入力ルールを設定。
- ・負担軽減のため非接触型体温計を導入した。

3

ユニット別業務動
線の確認と共有

- ・各ユニットの夜勤明け・早番の業務動線を確認し、非効率な点の共有・見直しを行った。

手順05

改善活動を振り返ろう

①バイタル測定の改善と業務動線の最適化

Q. バイタルの入力にかかる時間は？



バイタル測定の手順や入力ルールの設定、非接触型体温計などの導入により、申し送りノートへのバイタル記入時間が4.15分から2.83分に短縮された。

バイタル記入時間の短縮

効率的な測定による
オペレーションの改善

Q. 非接触型体温計の導入で効率的に測定を行うことができたか？



非接触型体温計の導入によって「効率的に測定を行うことができた」と回答した職員が全体の8割を占め、現場のオペレーションの改善が確認された。

非接触型体温計の導入により、検温時間の短縮と職員・利用者の負担軽減につながった。

看護職がメンバーに含まれておらず、多職種間での合意形成や意見集約に課題があった。

手順04

改善活動に取り組もう

活用したテクノロジー

ワイズマン

②情報共有の仕組みを構築、PCへの一本化推進

1

情報共有をPCへ移行

- 手書きの申し送りノートからPC共有（Excel活用）への移行様式を作成・周知。
- 申し送り事項や業務日誌のPC入力を基本とした。

2

PC（Wiseman）機能の活用徹底

- PC（Wiseman）の申し送り・業務日誌機能の周知を徹底し、情報共有・確認はPC上で行う運用を確立した。

3

各種スケジュールのPC一元管理

- 入退所、他科受診、外出泊予定などの共有情報をPC内に集約し、情報確認の効率化を図った。

手順05

改善活動を振り返ろう

②情報共有の仕組みを構築、PCへの一本化推進

Q.申し送り（口頭、ノート閲覧）にかかる時間は？

取組前

12.9分

取組後

9.5分

情報共有の仕組みを構築し、パソコンへの一本化を推進したことで業務の効率化が図られ、申し送りにかかる時間が12.9分から9.5分に短縮された。

申し送り時間の短縮

情報伝達ミス発生件数の減少

Q.週あたりの情報伝達ミス、情報伝達モレの発生件数は？

取組前

2.75件

取組後

1.88件

情報を一元管理したことで、情報伝達ミスの発生件数が週平均2.75件から1.88件へと減少した。

申し送り内容をPC入力へ移行したことで、伝達漏れのないスムーズな情報共有が実現した。

共有PCの不足や操作への不安があり、記録のデジタル化をスムーズに進められなかった。

手順06

実行計画を練り直そう



- 介護ソフト連動の機器導入により、バイタル入力の自動化とさらなる業務効率化を図る。
- 看護職や若手職員も活動に巻き込み、全職種が同じ熱量で取り組める体制を構築する。
- 会議のオンライン化やチャットツールの活用を徹底し、ペーパーレスな情報共有を推進する。
- 業務の無駄を徹底して排除し、全職員が定時で退社できる職場環境づくりに取り組む。